

平成 23 年度 第 1 回「歩くまち・京都」推進会議 摘録

1 日 時 平成 23 年 6 月 17 日（金）15 時～17 時

2 場 所 京都ホテルオークラ 3 階 曲水の間

3 出席者 別紙出席者名簿

4 議 事

- ・ 総合交通戦略に掲げる 88 の実施プロジェクトの進捗状況
- ・ 平成 23 年度の「歩くまち・京都」推進会議等の進め方について

（1）開会

（塚口会長：立命館大学教授）

- 「歩くまち・京都」総合交通戦略には斬新な 88 のプロジェクトが掲げられている。計画に立案されるだけでなく、実行していくことが必要であり、本推進会議の役割は大きいと考えられる。施策の中には、すぐに効果が現れるものから、効果を発揮するまでに時間を要するものまで、多様な特性があるので、相乗効果の発揮に向けて総合的に推進していく必要がある。
- ここ 1 週間で節電、エネルギー施策等、難しい問題が話題になっているが、公共交通においても社会的な課題に取り組まなければならない。
- 公共交通は、他の交通機関に比べてエネルギー消費が少ないことは明らかであり、今後の交通政策の在り方を考えなければならない。
- これまで厳しいながらも建設的な意見を頂いてきたが、本日も活発な御議論をいただければ幸いである。

（2）意見交換

（波床委員：大阪産業大学教授）

- 資料 6 について、順調に進んでいるというご報告であったが、今後は○と△に加えて完成したものは◎といった区分を追加されると分かりやすくて良いのではないか。

（事務局）

- 今後、進捗の評価については分析を深めて、1 つずつ優先順位の選定と課題の抽出に取り組んでいきたいと考えている。

（土井委員：京都大学大学院特定教授）

- 未来の公共交通推進会議の取組において、なぜ都心部かという、市民や来訪

者に京都が変わっていくということを発信していくためにも、例えば嵐山でのロードプライシングの仕組み作りというよりは、まず、四条通の歩道拡幅など都心での施策を推進していきたい。

- バス系統の再編では、長大系統の路線を含めて進捗状況に奥行きを持たせた議論を進めていきたいと考えている。
- 議論が独りよがりにならないよう、未来の公共交通推進会議のメンバーに交通事業者も参加することを検討したい。

(正司委員：神戸大学大学院教授)

- 公共交通ネットワーク推進会議と未来の公共交通推進会議は、施策のタイムスパンが異なるために二つに分かれていると認識している。本来、境界は無い方が良いが、分けるとすると、バス系統の再編について長期的で大きく変える取組は未来の公共交通推進会議で、少しずつでも手を付けていく取組を公共交通ネットワーク推進会議といった分担ではないかと考えている。
- 公共交通ネットワーク推進会議では、既存の地図や、バス停での情報提供など、事業者間の連携により、すぐ着手できる施策を推進していきたい。
- 情報提供に関して、既存の情報が、慣れていない人にとっては使いにくい、慣れた人には使いやすく、変化させると、慣れた人はとまどうことになりかねないので、議論しながら進めていきたい。

(佐藤委員：公益財団法人サントリー文化財団上席研究フェロー)

- 市民の方は「歩くまち・京都」憲章をみると、公共交通とは関連がなく、京都は歩くことに重点を置いているということにぐっと感じるものがあるのではないかな。
- No.40～42 の施策など、あまり進んでいないが、情報は、進んでいないと人は何も感じなくなる。一度〇になったものをどうやって、憲章につなげていくかが今後の課題と思われる。
- せっかく交通戦略を作っても、人が関わっていく所、人に見える所をどう作っているかが大事で、今年度からの課題と考える。
- 本日、この会議場に来るときに地下鉄の階段に描かれた燃え燃えプロジェクトは面白いと思った。こういった市民も参加できる取組が大切と思う。
- 「歩くまち・京都」が「目的」で、公共交通利用促進は「手段」であるが、手段に偏っているのではないかな。「目的」が理解できていない感じがする。市民は「目的」によって公共交通を利用するように思う。新しくできた「歩くまち・京都」憲章を踏まえて、「歩くこと」の意味を考え直すこと、人と人とのコミュニケーション、関わりが市民の方にとって重要である。

(事務局)

- 貴重な意見、ありがとうございます。取組内容や結果のアピールの仕方も未熟

なところがあるので、改善していきたい。

(事務局)

- 観光案内標識は道路標識を含めて、今設置されているのは、堅苦しく、今どこにいるのか分らないという意見がある。産業観光局や建設局などが一緒になって、京都らしい標識がないかを見直ししているところであり、京都府警などの協力も得ながら推進してまいりたい。

(森本委員：京都工芸繊維大学大学院教授)

- 前回の議事録に積極的に歩いてもらうことを推進したいとあり、これまでの経過でステップを踏んで、施策を進めている。これから事務局として「歩くこと」の重要性を打ち出して行かれるのではないかな。

(藤田委員：フリーエディター)

- 一人ひとりの市民が、困った人に対して、手をさしのべるような社会を作っていくことが、本当の意味で公共交通が使いやすいことにつながるのではないかな。

(森本委員：京都工芸繊維大学大学院教授)

- 保健福祉局の方で、ユニバーサルデザイン推進活動を進められており、そちらの取組と連携することが有効ではないかな。

(塚口会長：立命館大学教授)

- バリアフリーについては、心のバリアフリーなども含めて、効果をあげるところであるので、事務局としてもぜひ実践してほしい。

(事務局)

- 嵐電とヤマト運輸が連携をした取組で、嵐電を活用して、宅急便の荷物を運搬している。駅からは自転車を使って配送しているのだが、防犯機能や道案内などの心のふれあいの効果も現れていると聞いている。今後、こういった活動が広がるように、行政としてもバックアップをしたいと考えている。

(佐藤委員：公益財団法人サントリー文化財団上席研究フェロー)

- パークアンドライドを充実されたところのご説明があったが、結果がどうなったかわかったら教えていただきたい。

(事務局)

- パークアンドライドの通年実施については、浜大津、リサーチパーク、長岡京市など多くのエリアで取組を進めており、利用台数も着実に増加してきている。
- 観光地の交通対策として、まだまだ充分ではないと認識しているので、定着さ

せていきたいと考えている。

(村上委員：株式会社京都放送ラジオ編成制作局長)

- 「スローライフ京都」推進会議では、市民目線で「歩くまち・京都」をどうやったら実現できるか議論している。資料8の P.139 にあるように平安女学院の学生から先日インタビューされた。京都は学生のまちであり、学生も巻き込んで、一緒に取り組んでいけると、効果も増大につながるのではないかと。
- 節電の話題については、ラジオでは、京都人が昔から実践してきた、すだれ、打ち水などのエコアイデアを紹介することで、歩くまちにもつながるのではないかと検討しているところである。今後、キャンペーンを展開することを考えている。

(土井委員：京都大学大学院特定教授)

- 成果があがったということに対して、市民の皆様に分かりやすく伝えることが大事である。
- 今まで外出しなかった人が歩いて外出するようになったとか、高齢者の外出機会が増えることにより、歩くことによって健康になって医療費が抑制されたというような、アウトカムの成果を把握できるように幅広いデータを取れば良いと考える。
- 例えば、クルマと公共交通の来訪手段の違いによる消費金額を調査すると、一回あたりの消費額はクルマの方が多いが、1カ月位のスパンで考えると、来訪頻度が多いのでトータルでは公共交通の方が多という結果がある。京都市の商工部局と合同で、大規模な消費金額の調査を実施してはどうか。
- 標識の話に関連して、クルマからは見えるが歩行者目線からは見にくい場合があるので、改善できると良い。

(森本委員：京都工芸繊維大学大学院教授)

- 「スローライフ」という言葉について、市民にとって分かりやすいのだろうか。京都らしい、例えば「歩育」(ほいく)といった造語も考えられるのではないかと。分かりやすいキャッチフレーズに変えてはどうか。
- 3つの推進プロジェクトをトータルに考えるには、最終的なライフスタイルをどうするのかという目標が必要である。

(村上委員：株式会社京都放送ラジオ編成制作局長)

- 様々な意見により、「スローライフ」という用語を採用したと認識している。

(事務局)

- さまざまな経過をたどって、「スローライフ」にたどり着いた。昨年度の意見にもあったが、KBSが長年取り組まれた「かたつむり大作戦」は、市民に浸透

した言葉であったと思う。今後は、市民の皆様の意見も踏まえながら形付ければよいと考えている。

(大石委員：大石内科クリニック院長)

- 市民にどのようにこのプロジェクトに参加して頂くかが重要である。そのため、市民の方の意見が掴めるようなシステムがあると良い。
徳島県が、糖尿病患者の死亡率が三年間一位になっていたのが、市民ぐるみの取組により、数年後に三位か五位まで下がったという実績がある。市民が問題意識を持って取り組むことが重要である。京都府も糖尿病患者数は上位であるので、意識を持って取り組んでもらえると良い。

(塚口会長：立命館大学教授)

- 市民の方にとってインセンティブは重要と考える。

(波床委員：大阪産業大学教授)

- ある自治体で、新幹線の駅前の軌道敷に芝生を植えたところ、圧倒的な支持を得たため全市に展開したという事例がある。継続的にプロジェクトを実施していくためには、市民に対し、分かりやすい結果を知らせていくことが大切である。
- 88プロジェクトについて、協力者の自助努力で推進しているものも多く見受けられる。短期的な協力を継続的なプロジェクトにつなげていくためには、定期的に表彰等により名誉を与える方法も考えられるのではないかな。

(西委員代理：醍醐コミュニティバス市民の会会長代行)

- バス系統について、住宅事情も変わってきているところもあるので、再編することによって使いやすい系統に変えてほしい。

(正司委員：神戸大学大学院教授)

- バス系統を変更すれば、利益が上がるということであれば、事業者も自主的に取り組めるのであるが、リスクをおかしてまで取り組めないところもある。情報共有しながら、手を付けやすいところから進めていきたい。出来るだけ効果の高いところから進めていきたいと考えている。

(土井委員：京都大学大学院特定教授)

- 事業者が中心になって取り組めるバスの再編などについては、公共交通ネットワーク推進会議で進められると考えている。同じバスの再編という言葉ではあるが、まちづくりの視点から見ると事業者だけではできない施策、例えば路線設計のあり方などが多くあり、それは未来の公共交通推進会議で推進していければ良いと考えている。

(山形委員：京都府警察本部交通部長)

- 総論賛成・各論反対というところがあるので、施策の推進状況と効果を市民に伝えることが重要である。行政は報道や広報等の重要性や影響力は知っているが、戦略的な広報活動が不慣れであるのが実態であるので、今後注力していく必要があるのではないか。

(関委員代理：建設交通部交通政策課長)

- 京都府としては、大都市部だけでなく、公共交通が決して便利でない地域を如何に活性化していくかが、大きな課題である。その上で、「歩くまち・京都」の取組を我々のテリトリーにどう活かしていくかが課題と考えている。公共交通に人が乗っていただくことが重要であり、情報発信をすることにより乗る機会づくりを行うが有効ではないか。利用されればネットワークとしての公共交通がもう一度再評価され、公共交通に投資することがまちづくりに不可欠であるという認識につなげていければと思う。

(江橋委員：国土交通省近畿地方整備局建政部長)

- 公共交通と徒歩という組み合わせと、自転車交通はライバル的な交通手段であるので、歩行者と自転車の位置付けの整理が大切と考える。3月11日以降、東京では、自転車が大変多くなるとともにその交通マナーの悪さも気になるようになった。

(塚口会長：立命館大学教授)

- 京都市は、自転車政策を非常に熱心に行っているが、事務局として何か意見があれば述べてほしい。

(事務局)

- 自転車の走行マナーについては、京都市でも問題になっている。昨年11月に御池通で白線のテープを貼って、歩道をゆっくり走ることを促す社会実験を実施して、一定の効果が確認できた。現在、国や京都府とも連携しながら、自転車の走行環境の整備をしているところである。

(森委員：国土交通省近畿運輸局企画観光部長)

- 手段ではなくて目的が大切であったり、市民に見せていくことが大事であるということ、また使う人が分かりやすいものでないといけないといった各委員のご意見を持ち帰らせていただいて、運輸局の取り組みにも活かしてまいりたい。

(森本委員：京都工芸繊維大学大学院教授)

- どんなライフスタイルになるかというイメージを見せることが重要ではないか。歩くまちになることによるイメージ図がほしい。

(事務局)

- 「歩くまち・京都」総合交通戦略に掲載した未来のまちのイメージの映像は作成したが、歩行空間や未来の交通機関などの映像であり、人を主人公とした映像にはなっていない。皆様のご意見を伺っていて、「まち」がどうなるかだけでなく、「ひと」がどうなるかについても作成できるように努力していきたい。

(土井委員：京都大学大学院特定教授)

- 感性に働きかけることも大事であると同時に、データ等を用いて理性に働きかけることも大事である。パーソントリップ調査などの定量的なデータを使って交通の現状を確認すると同時に、公共交通の利用促進やサービス改善に結びつくような、議論を行うことが重要である。また、市職員の皆さんについてデータ活用のスキルを上げていきたい。

(正司委員：神戸大学大学院教授)

- 節電の取組については、ピークカットが重要である。もし鉄道の運行を間引くのであれば、利用者の少ない便から減便すべきと思う。

(森委員：国土交通省近畿運輸局企画観光部長)

- 節電に対する自主的な要請は、電力会社と事業者との間の個別の契約の話であるが、利用者だけで判断するのではなく、公共交通として、鉄道の果たすべき使命なども勘案しながら著しく不便とならないように検討してほしいと考えている。利用者が少なくても公共交通は大切である。関係者間でうまく調整してほしい。

(内藤副会長：京都大学名誉教授)

- 88のプロジェクトのうち、京都の市民にも観光客にも目に見えるシンボリックな取組があると旗印になり、求心力が高まる。そういうものがあると、環境のまちづくりについて講演する機会に、京都市の例を紹介するにあたっても有り難い。「歩くまち・京都」として、1つ目玉となる事業を整備してほしい。

(塚口会長：立命館大学教授)

- 皆様方の意見は、市民の共感を得るために「分かりやすい」結果で説明することが必要であるというものが多かった。事務局の皆様は、「分かりやすさ」を念頭に推進してもらいたい。
- 京都は学生のまちということもあり、若い人や、公共交通になじみの薄い子供

への働きかけの重要性も指摘された。

- ハード的なシステムだけでなく、人と人とのコミュニケーションなどによる使いやすさなどソフトも重要であると指摘された。
- 目玉になるシンボリックな施策の重要性も指摘されたが、そろそろ正念場を向かえていると思っている。四条通の交通改善を完成させることがインパクトを持って受け止められ、他の施策を引っ張っていくものになると考える。

(3) 閉会（由木副市長）

- 四条通や京都駅南口など、様々なプロジェクトにおいて、次に繋げていけるように、目に見えるような形で、一歩ずつ進めていきたい。
- 個別のプロジェクトに関して、また、全体の進め方や方向性について、委員の皆様には引き続きご支援を賜りたい。

平成 23 年度 第 1 回「歩くまち・京都」推進会議 出席者名簿（敬称略）

	所 属 ・ 役 職 等	氏 名	代 理 出 席 者
会 長	立命館大学教授	塚口 博司	
副会長	京都大学名誉教授	内藤 正明	
委 員	醍醐コミュニティバス市民の会会長代行	岩井 義男	副会長 西 正勝
	国土交通省近畿地方整備局建政部長	江橋 英治	
	大石内科クリニック院長	大石 まり子	
	公益財団法人サントリー文化財団上席研究フェロー	佐藤 友美子	
	神戸大学大学院教授	正司 健一	
	京都大学大学院特定教授	土井 勉	
	大阪産業大学教授	波床 正敏	
	フリーエディター	藤田 晶子	
	京都府政策企画部企画監	本田 一泰	建設交通部交通政策課長 関 正典
	株式会社京都放送ラジオ編成制作局長	村上 祐子	
	国土交通省近畿運輸局企画観光部長	森 宏之	
	京都工芸繊維大学大学院教授	森本 一成	
	京都府警察本部交通部長	山形 克己	

事 務 局 (京都市)	副市長 交通政策監 都市計画局長 都市計画局歩くまち京都推進室長 都市計画局歩くまち京都推進室事業推進担当部長 建設局土木技術担当局長（都市計画局土木技術担当局長） 他	由木 文彦 水田 雅博 寺田 敏紀 堀池 雅彦 吉田 良比呂 河嶋 敏郎
----------------	--	---